

日頃より、私どもへの励ましやご協力をありがとうございます。心より感謝申し上げます。

過日ある福祉系大学でテーブルを囲んで先生からお話を伺っていた時「この前の夏休みに卒業生たちが来て『入職から数か月経つが、現場で何も教えてもらっていない』と言うのです。彼らは福祉施設に就職している学生たちですが、皆さんのところではどうなのでしょう」と問われました。それに対してある施設長さんは「いや、今の若い人はここを教えてくださいなどと質問してこないのです。どうしてなのか、ちょっと気がかりです」と応じ、しばらくの間若い職員への期待や管理職としての課題、また良い支援者であるには何が必要なのかといった日頃の思いを話しました。今は入学時のガイダンスなども丁寧に行われる時代、それを踏まえて我々は対応しているのかとその考えました。

福祉の現場では自ら問題意識をもって課題をとらえ、その解決を模索する姿勢が求められます。たやすくはありませんが支援者としての充実感や達成感はそのような取り組みから得られ、それがまた自身のエネルギーにもなっていきます。ただそこで重要なことは現場で一体となって取り組んでいるのかどうかです。そこに我々リーダー層の大事な役目がありますが、世代間で相互に感じるギャップがあるとすればこれは解決していかなければなりません。

「今から振り返ると4月はどうやって仕事していたのかあまり思い出せない」と若い職員が述懐したことがあります。入ったばかりは夢中で先輩や上司に質問している暇もなく、とにかく全力で仕事に向き合ったということだとわかります。若い職員の頑張りも見事なものです。

管理職世代は自分たちの成功体験をその時代固有の背景抜きに語りがちです。

「自分たちの頃はこうだった」と。しかしそれでは若い世代を疎外してしまうおそれがあります。私も自戒しているところです。ただ彼らにはそういう話もヒントにしながら、現場の様々な体験の中で自分なりに模索し、どんな仕事をしていきたいのかを見出し、自らを開拓して欲しいと思います。若い世代が大きく育つことを私は願っています。

さて、我々はこの3月に5つ目のグループホームをスタートさせました。地域に根差したグループホームとしてしっかり運営していきたいと思います。市役所食堂「さくらごはん」は開店して1年が過ぎました。おかげさまで好評を得ております。

このように我々は幅広く事業を展開しておりますが、どの部署においても職員は旺盛な意欲をもって仕事をしています。今、社会福祉法人のあり方そのものが問われる時代になりましたが、我々はこれに積極的に向き合い、法人としての一体性をより高め、地域福祉の一翼を担うという志向性を高めて新たな取り組みにも邁進していきたいと思います。

今後ともご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

平成27年4月

理事長 安藤真洋